

# 目標を表す「～にむかって」「～にむけて」

井上 優

## 1. はじめに

本稿では、行為の目標を表す「～にむかって」「～にむけて」（以下「むかって」「むけて」と略す）の意味について考察する。その際、動詞句の意味をいくつかに分類し、それぞれの場合について「むかって」「むけて」を比較するという形をとる。

なお、「むけて」は「太郎がオリンピックにむけてトレーニングに励む」「夏子が夏にむけてシェイプアップに励む」のように、「事柄」「時」を目標とすることができるが、これについては、「めざして」との比較で井上（1986）で考察したので、本稿では考察対象からはずす。

## 2. 動詞句が主体・対象の定位、主体の移動を表す場合

### 2.1. 動詞句が「主体の定位」を表す自動詞の場合

動詞句が「立つ」「座る」「寝る」など、「主体の定位」「一定の場所における主体の態勢変化」を表す場合は、「むかって」は適格だが、「むけて」は不適格である。

(1) 太郎が 壁にむかって (床に) 立つ／座る／寝る。

(2)<sup>×</sup> 太郎が 壁にむけて (床に) 立つ／座る／寝る。

この場合、「むかって」は「主体が空間的に相対する」目標を表す。

動詞句がテイル形で「主体の動きの結果としての存在」を表す場合も、「むかって」のみが適格で、「むけて」は不適格である。

(3) 太郎が 壁にむかって 立っている／座っている。

(4)<sup>×</sup> 太郎が 壁にむけて 立っている／座っている。

(5) 立山が 富山平野にむかって そびえている。

(6)<sup>×</sup> 立山が 富山平野にむけて そびえている。

この場合も、「むかって」は「主体が空間的に相対する」目標を表し、「むかって」を「むかった状態で」とおきかえても、文の意味は変わらない。

(7) 太郎が 壁にむかった状態で 立っている／座っている。

(8) 立山が 富山平野にむかった状態で そびえている。

ただし、「むかって」は、「ある」「いる」のような単純に「存在」を表す動詞とは共起せず、あくまで「主体の動きの結果としての存在」を表す動詞句でなければなら

ない。

(9)<sup>x</sup> 太郎が 壁にむかって いる。

(10)<sup>x</sup> 立山が 富山平野にむかって ある。

また、主体と目標が空間的に相対する関係にある場合でも、「むかって」が不適格な場合がある。例えば、(1)の主体と目標を入れかえると不自然になる。

(11)<sup>??</sup> 壁が 太郎にむかって 立っている。

しかし、「壁」の「太郎」に対する一定の影響が想定される文脈が与えられれば、適格になる。

(12) ベルリンの壁が 太郎にむかって 立っている。

(12)は、「ベルリンの壁が太郎の前に立ち<sup>は</sup>だ<sup>か</sup>っ<sup>て</sup>い<sup>る</sup> (=太郎の行く手をはばむ)」といった意味あい、すなわち「ベルリンの壁が太郎に一定の影響を与える」という意味が認められる。

これに関連して、山田(1985)は、「家の横に自転車がある」「石の上にチョウがとまっている」は自然だが、「?自転車の横に家がある」「?チョウの下に石が置いてある」は不自然であることを指摘し、一つの状況に二つの参加者が含まれる場合、どちらかが叙述の固定点(陳述のベース、この場合「目標」として表わされる)として選ばれるとともに原則として「不動体>動体」「大きなもの>小さいもの」という順で陳述のベースになりやすいとしている(山田1985参照)。

これはいいかえれば、「働きかけの方向性」が想定しやすいものが陳述のベースになるということであろう。(11)が不自然なものも、主体が「壁」(=不動体)、目標が「太郎」(=動体)であるために、「不動体>動体」という原則に違反し、ひいては「壁→太郎」という働きかけが想定しにくいからである。動詞句が「存在」を表す場合でも、何らかの形で「主体の目標に対する働きかけ」が想定されねばならないのである。

## 2.2. 動詞句が主体の移動を表す自動詞の場合

動詞が「動く」「進む」「歩く」「出発する」など、主体の空間移動を表す(あるいは主体の空間移動を含意する)動詞の場合、「むかって」「むけて」は「主体が移動する」目標を表す。

(13) 太郎が 出口/ゴールにむかって 歩く/進む。

(14) 太郎が 出口/ゴールにむけて 出発する。

(15) 太郎が 北京にむかって 歩く/進む。

(16) 太郎が 北京にむけて 出発する。

「むけて」の場合、目標は基本的には「場所」として捉えることができるものでなければならぬが、「むかって」にはそのような制限はない。

例えば、目標がモノの場合、「むかって」は適格だが、「むけて」は不適格である。

(17) 太郎が 電信柱／壁／ドアにむかって 歩く。

(18)<sup>×</sup> 太郎が 電信柱／壁／ドアにむけて 歩く。

また、目標が「人間」の場合も「むけて」は不適格である。「むかって」は(多少不自然さは残るものの)不適格だとはいえない(適格とする話者も何人かいた)。実際、「～ていく」を加えるとかなり自然になる。

(19)<sup>?</sup> 太郎が 花子にむかって 歩く。(cf. 太郎が 花子にむかって 歩いていく。)

(20)<sup>?</sup> 太郎が 花子にむかって 進む。(cf. ?太郎が 花子にむかって 進んでいく。)

(21)<sup>×</sup> 太郎が 花子にむけて 歩く。

(22)<sup>×</sup> 太郎が 花子にむけて 進む。

「出口」「北京」「ゴール」が「場所」で、「花子」「電信柱」「壁」「ドア」が「場所」でないということは、そのままの形で「行く」の二格成分にはなるかどうかという点からも確認される。

(23) 太郎が 出口／ゴール／北京に 行く。

(24)<sup>×</sup> 太郎が 花子／電信柱／壁／ドアに 行く。

「むけて」が表すのは「(動詞が表す行為を続ければ)最終的に主体が到達する場所」であるが、「むかって」が表すのは「主体が空間的に接近するモノ・場所」として捉えることができよう。

### 2.3. 動詞句が対象の定位を表す他動詞の場合

動詞が「立てる」「置く」など「対象の定位」を表す他動詞の場合、「むかって」「むけて」はともに適格である。

(25) 太郎が 次郎にむかって (床に) マイクを立てる。

(26) 太郎が 次郎にむけて (床に) マイクを立てる。

(27) 太郎が 窓にむかって (床に) 机を置く。

(28) 太郎が 窓にむけて (床に) 机を置く。

ただし、この場合「むかって」と「むけて」では、文の表す状況が多少異なる。

「むけて」を用いた(26)(28)は、「マイクが次郎の方を向くように立てる」「机が窓の方

を向くように置く」というように、「対象を目標に空間的に相対させるように置く」ことを表す。そのことは、次のように語順を変えるとよりはっきりする。

(29) 太郎が マイクを 次郎にむけて (床に) 立てる。

(30) 太郎が 机を 窓にむけて (床に) 置く。

しかし、「むかって」を用いた(25)(27)は、「太郎が次郎(壁)の方をむいた状態でマイクを立てる(机を置く)」(解釈①)、「太郎がマイクを立てる(机を置く)ことで次郎(窓)に働きかける」(解釈②)という意味が強いように思われる。

いずれにせよ、「むかって」においては、主体と目標の位置関係・影響関係が問題になるのであり、「対象を目標に空間的に相対させるように置く」という意味ではない。それに対し、「むけて」はあくまで「対象と目標との位置関係」を問題にする。このような違いから、「むかって」「むけて」は単文中に同時に生起することも可能である。

(31) 太郎が 次郎にむかって マイクを 三郎にむけて 立てる。

(32) 太郎が 窓にむかって 机を 壁にむけて 置く。

以下の二節では、「むかって」「むけて」のこのような意味の違いについて、少し詳しく考える。

### 3. 「主体の行為を受けとめる」目標を表す「むかって」

#### 3.1. 「むかって」の二つの意味

2.1.、2.2.では、「むかって」の表す目標が、「主体と空間的に相対・接近する関係にある」目標の場合について見た。しかし、次のような場合はどうだろうか。

(33) 太郎が マイク/受話器にむかって 大声を出す。

(34) 太郎が ワープロにむかって 論文を書く。

(33)(34)は、「太郎がマイクの方をむいた状態で(誰かに)大声で叫ぶ」「太郎が体をワープロの方にむけた状態で論文を書く」という解釈もできないわけではない(解釈①)。しかし、実際は「マイク(受話器)に対して大声を出す」「ワープロを使って論文を書く」くらいの解釈が普通であろう。(解釈②)。

重要なのは、解釈①と解釈②が、本質的に異なる位置づけがなされるべきだということである。

(35) 太郎が ワープロにむかって ほほえむ。

(36) 太郎が ワープロにむかって 踊る。

(35)(36)は、単に「太郎がワープロの方をむいた状態で誰かにほほえむ(踊る)」という解釈もできないわけではないが、一方でかなり奇妙な状況を表すという印象も受け

る。それは解釈①は可能だが、解釈②はかなり難しいということにほかならない。

本節では、解釈②における「むかって」の意味について考える。したがって、以下の「むかって」を用いた例文の適格性の判定は、解釈②が自然かどうかを基準とする。

### 3.2. 「目標」の性質

まず、(37)と(38)を比較することから始める。

(37) 太郎が マイク／受話器にむかって 大声を出す。(=33)

(38)<sup>??</sup> 太郎が ワープロにむかって 大声を出す。

(37)(38)で異なるのは、目標である「マイク」「受話器」「ワープロ」だけである。よって、両者の適格性の違いは、目標の性質の違いによるしななければならない。そして、その違いは、「目標が主体の行為を受けとめる機能を持つか否か」という点にあると考える。「マイク」「受話器」は「大声を出す」結果生ずる「声」を受けとめる機能を持つ装置だが、「ワープロ」はそのような機能は持たないといってよい。

もちろん、(38)も「＜音声入力ワープロ＞を使って原稿を書いているが、性能が悪く、大声を出さないと反応してくれないために＜大声を出し＞て入力する」という状況であれば適格であろう。このことも、「主体の行為を受けとめる機能を持つか否か」によって、「むかって」の適格性が決まるということの反映であろう。

(39) 太郎が 花子にむかって 話しかける／声をかける。

(40)<sup>×</sup> 太郎が マイクにむかって 話しかける／声をかける。

(41) 太郎が 花子にむかって ほほえむ／挨拶する。

(42)<sup>×</sup> 太郎が マネキン人形にむかって ほほえむ／挨拶する。

「話しかける」「ほほえむ」「挨拶する」行為は、本来「人間」を相手にし、「聞き手の注意を喚起したり、一定の心的状態を引き起こそうとする」行為である。(40)(41)が不適格なのも、無生物である「マイク」「マネキン人形」が何かに注意を向けたり、一定の心的状態を持つことがない、すなわち「話しかける」「ほほえむ」「挨拶する」行為を受けとめることがないからである。

「話す」「話しかける」「声をかける」「ほほえむ」「挨拶する」などは、基本的には「働きかける相手」が想定される動詞である。数際、「働きかける相手」を表す二格、あるいは「～に対して」をとることができる。

(43) 花子に対して 大声を出す。

(44) 花子に／に対して 話しかける／声をかける。

(45) 花子に／に対して ほほえむ／挨拶する。

(37)(39)(41)の「むかって」も、この種の二格、「～に対して」と（決して同じではないが）似た意味で使われているのである<sup>1</sup>。

### 3.3. 「利用」行為の受容

「勉強する」「化粧する」などの動詞は、本質的に「働きかける相手」を表す二格、および「～に対して」とは共起しない。しかし、「むかって」は適格である。すなわち、動詞自体に「働きかける相手」が想定されなくても、「むかって」を用いることは可能なのである。

- (46) 花子が 鏡にむかって 化粧する。
- (47)<sup>x</sup> 花子が 鏡に／に対して 化粧する。
- (48) 花子が テレビにむかって 勉強する。
- (49)<sup>x</sup> 花子が テレビに／に対して 勉強する。
- (50) 花子が 地図にむかって 旅行の計画をたてる。
- (51)<sup>x</sup> 花子が 地図に／に対して 旅行の計画をたてる。

(46)(48)(50)も、単に、「目標の方をむいて何かする」状況を表すだけではない。実際、これらの文の動詞部分を入れかえた(52)(53)(54)は不自然である。

- (52)<sup>??</sup> 花子が 鏡にむかって 旅行の計画をたてる。
- (53)<sup>??</sup> 花子が テレビにむかって 化粧する。
- (54)<sup>??</sup> 花子が 地図にむかって 化粧する。

考えてみれば、(46)(48)(50)は、「鏡を利用して化粧する」「テレビを利用して勉強する」「地図を利用して計画をたてる」という状況であって、単に「鏡の方をむいて化粧する」「テレビの方をむいて勉強する」「地図の方をむいて計画をたてる」という状況を表わすわけではない。

つまり、(46)(48)(50)における目標は、「主体と空間的に相対している」のみならず、一種の「道具」として、主体の行為を受けとめていると考えられる。もちろん、(54)などは、「ブラウン管に顔を映して化粧する」という状況では適格である。しかし、普通「化粧する」ことは「鏡」と語用論的に密接な関係にあるが、「テレビ」「地図」とは密接な関係にない。すなわち、普通「テレビ」「地図」が「化粧する」行為を受けとめるという状況はない。(53)(54)が不自然なのはこのためである。

- (55) 花子が キャンバスにむかって 絵を描く。
- (56) 花子が キャンバスにむかって あれこれ考える。
- (57)<sup>x</sup> 花子が キャンバスにむかって 化粧する。

(59)が適格なのは、「キャンバス」が「絵を描く」ための道具だからである。また、(58)は「キャンバスにどのような絵を描こうか、あれこれ考える」という状況を表す。その場合も、「キャンバス」は一種の考察対象として、「花子の〈考える〉行為を受けとめ」ているといえよう。しかし、「化粧する」際に「キャンバス」を使うことはない。(57)が不適格なのは、そのためである。

「むかって」が表す目標は、単に「主体と直接的に相対する関係にある」のみならず、「主体の行為を受けとめる」ものでなければならないわけである。動詞句が「存在／定位」「移動」を表す場合に、「主体が空間的に相対する目標」「主体が空間的に接近する目標」を表すのも、動詞自体が「主体が目標との間に一定の空間的な位置関係を成立させる」行為を表すからであって、目標が「主体の行為を受けとめる」目標である点は同じであると考えられる。

#### 4. 移動目標を表す「むけて」

##### 4.1. 「モノを受けとり手」としての目標

「むけて」は、「何かを目標に与えようとして移動させる」という意味合いが強い。実際、「むけて」が表す目標は、「受けとり手」すなわち「ものを受け取る・持つ能力があるもの」として捉えられるものでなければならない。

(58) 花子が 太郎にむかって ボールを投げる。

(59) 花子が 太郎にむけて ボールを投げる。

(60) 花子が 壁にむかって ボールを投げる。

(61)<sup>??</sup> 花子が 壁にむけて ボールを投げる。

「太郎」は「ボールを受けとる」ことができるが、「壁」にはそのような能力はない。(61)が不自然なもの、「花子」と「壁」との間に「ボールの授受関係」が想定できないからである。

一方、(58)(60)は、単に「太郎(壁)にボールが命中するように投げる」ことを表す。「太郎」「壁」は、「人間」と「モノ」という違いはあれ、「命中の対象」としての意味合いに変わりはない。

また、次の例を見よう。

(62) 太郎が 花子にむかって 手紙を書いてみせた。

(63) 太郎が 花子にむけて 手紙を書いてみせた。

(62)は、「(誰かに)手紙を書く」という行為を「花子に見せた」という状況に解釈される。しかし、(63)は、「花子宛の手紙を書く」という行為を「(誰かに)見せた」とい

う状況に解釈される。つまり、次のような意味関係になっている。

(64) 「花子にむかって [(誰かに) 手紙を書いて] みせた」 (=62)

(65) [(誰かに) [花子にむけて手紙を書いて] みせた]] (=63)

「むかって」が「手紙を書く行為を見せる」目標を表すのに対し、「むけて」はあくまで「手紙を書く」目標を表す。「むけて」が「モノの受けとり手」を表すということは、ここでも明らかである<sup>2</sup>。

#### 4.2. 動詞句が「言語活動」を表す場合

動詞句が「言語活動」を表す場合、「聞き手に具体的な情報を伝える」という意味が想定されなければ、「むけて」は不自然である。

(66) 太郎が 有権者にむかって 行政改革の必要性を訴える。

(67) 太郎が 有権者にむけて 行政改革の必要性を訴える。

(68) 太郎が マイクにむかって 行政改革の必要性を訴える。

(69)<sup>x</sup> 太郎が マイクにむけて 行政改革の必要性を訴える。

「行政改革の必要性を訴える」ことは「聞き手に情報を伝える」行為である。「人間」である「有権者」は、「聞き手」として情報を受けとることができる。しかし、「マイク」は「音声」を受容することはできても、情報を受けとって理解することはできない。つまり「聞き手」にはなれない。(69)が不適格なのも、単なる「音声受容装置」である「マイク」を「聞き手」として述べることになるからである。

(70) 太郎が 花子にむかって わけのわからないことをわめく。

(71)<sup>??</sup> 太郎が 花子にむけて わけのわからないことをわめく。

(72) 太郎が 花子にむかって 話しかける。

(73)<sup>??</sup> 太郎が 花子にむけて 話しかける。

「わけのわからないことをわめく」「話しかける」は、「聞き手」に具体的な情報を伝えようとする行為ではなく、したがって主体と目標との間に、「情報の授受関係」が想定できない。(71)(73)が不自然なのはそのためである。しかし、「わけのわからないことをわめく」「話しかける」ことは、「花子」に働きかけることではあるため、「むかって」は適格である(3.2.参照)。

#### 4.3. 「むかって」「むけて」と心理的距離

「むかって」が表す目標は、「主体と直接的に相対する関係にあり」かつ「主体の行為を受けとめる」ものである。それに対し、「むけて」は「主体が何かを与える」

目標である。そのことと関連すると思われるが、「むけて」は「むかって」に比べて、(心理的に) 違いと捉えられる目標を表すことが多い。「むけて」においては、「モノが目標に至る」までの何らかの経過が想定されねばならないのかもしれない。

(74) 牧師が 目の前に座っている 太郎にむかって 神の教えの尊さを説く。

(75)<sup>?</sup> 牧師が 目の前に座っている 太郎にむけて 神の教えの尊さを説く。

(75)が多少不自然なのは、「ジョンにむけて」が「ジョンが牧師から(心理的に) ある程度離れている」ことを含意し、「ジョンが目の前に座っている」と矛盾するからである。

(76) 太郎が 花子にむかって 愛の言葉をささやく。

(74)<sup>??</sup> 太郎が 花子にむけて 愛の言葉をささやく。

(78)<sup>x</sup> 太郎が 花子にむかって 手紙を送る。

(79) 太郎が 花子にむけて 手紙を送る。

(77)が不自然なのは、「ささやく」が聞き手が眼前(あるいは電話口)にいることを語用論的に含意するからである。それに対し、(78)が不適格なのは、逆に「手紙を送る」という行為が、受け手である「花子」を目の前にしての行為とは捉えられないからである。

## 5. まとめ

以上、「~にむかって」「~にむけて」の意味について考えた。それぞれが表す目標の性質を、次のようにまとめておく。

むかって：「主体と空間的に相対し、かつ主体の行為を受けとめる」目標

むけて：「行為の対象が空間的に相対、あるいは行為の主体、対象が移動する」  
目標

重要なのは、「むかって」が、基本的に「主体の働きかけを受けとめる目標」を表すために、動詞が表す働きかけの性質に応じて目標の性質も変わるということ、及び「むけて」が表す目標が、あくまで「移動物が移動目標とする場所」であるために、動作も「移動」に関係があるものでなければならないという2点である。

(注)

1. 次の例は、「山」「空」が「マイク」のように「声」を受けとめる機能を持たないにもかかわらず、決して不自然ではない。

(80) 太郎が 山(空、城)にむかって 叫ぶ。

しかし、この場合も「『山』『空』『城』が「叫び声」を吸収する」というイメージで捉えられるだけの空間的な広がりがあるからこそ、自然なのだと考えられる。

(81)<sup>??</sup> 太郎が 電信柱にむかって 叫ぶ。

(81)が不自然なもの、「電信柱が声を吸収する」というイメージそのものが不自然だからであろう。

2. 「やる／あげる」「渡す」などの動詞は「むかって」「むけて」ともに不適格である。

(82)<sup>×</sup> 太郎が 花子にむかって プレゼントを あげる／渡す。

(83)<sup>×</sup> 太郎が 花子にむけて プレゼントを あげる／渡す。

この種の動詞は、「～に対して」も不適格になる。

(84)<sup>×</sup> 太郎が 花子に対して プレゼントを あげる／渡す。

(82)(83)(84)が不適格である理由は本質的には同じだと思われる。

#### ／参考文献／

井上 優 (1986)「目標の意味論——めがけて・めざして——」『日本語研究』第8号

国立国語研究所 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

森田良行 (1980)『基礎日本語2』角川書店

森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

山田 純 (1985)「文における視点」『日本語学』第4巻12号

山田忠雄他編 (1975)『新明解国語辞典第三版』三省堂

言語経歴 1962年 富山県東砺波郡井波町生まれ

0歳～18歳 井波町

18歳～23歳 宮城県仙台市

23歳～ 東京都(杉並区・目黒区)

(いのうえ まさる・東京都立大学大学院学生)